

寿町の「なか伝道所」を最後の宣教地とされた渡辺英俊牧師が、『書き遺す 神学へのメモー贖罪・文化・老いるー（私家版）』を出され、私にも贈ってくださいました。「書き遺す」という言葉から分かるように、米寿を迎えられた渡辺師は遺言を語るような思いで書かれたのだと思わされた。80頁ほどの小さな本であるが、イエスにかけた人生と神学が披瀝されている。渡辺師らしい真っ直ぐな論述を、感動をもって読んだ。

Iの「『贖罪』ということー解放の神学の視点から」を興味深く読んだので、私の理解による渡辺師の神学を紹介したい。渡辺師は、「史的イエス」と「贖罪論」が神学の営みの中心的関心であったと書き始めている。史的イエスについては、『イエスに迫る』などの著書で、渡辺師の関心事であることは絶えず聞いてきた。4つの福音書は、史的イエスを伝えたのではなく、キリスト告白が生み出した文書である。歴史的・批判的な聖書学から、史的イエスを模索すると、差別、抑圧されている民衆に解放を告げ、実践するイエス像が確かな姿として認識される。この認識は「イエスに従う」という決断に促される。渡辺師は、寿町の「寄せ場」という「低み」に置かれた人々と関わり、移民の存在を受け入れない日本社会で、外国人労働者の権利を守る運動を通して、「イエスに従う」生き方を実践的に模索してきたが、中途半端さと弱さと破れた自分の姿を見せられたと言われる。倫理的要請として、十字架の死に至るまで「イエスに従う」ことなど、誰にもできない。しかし、十字架の恐怖から逃げ去った弟子たちが再結集したことは、十字架を「贖罪」として意味づけし、赦されて立ち直ることを可能にした。現代の教会においても、「贖罪」信仰が必要とされる理由があると言われ、贖罪を再点検したいと筆を進めておられる。

贖罪は、まず人間の罪を露わにし、その罪が義なる神に裁かれ、死刑宣告をうけるべきところ、イエスが十字架にかかり、罪の身代わりとして死んでくださったという信仰理解であった。これは、神の一人芝居で、人間はこれを見て、そうですか「ありがたい」と承服する。それが「贖罪信仰」で、そこに、神からの義が宣告され、救われるという教理である。この教理は、全てが抽象化・内面化され、イエスの公生涯の意味、また、十字架の史的状況を見ないので、社会的関心は捨て去られている。

イエスの公生涯は、飢え渴く者たちが満たされ、病が癒され、人間に回復していく神の国の到来を告げた。この言動は宗教的、政治的権力者からは社会の在り方を覆す危険なものと思われ、十字架の死へと追い込まれていった。イエスの復活を経験した弟子たちは、十字架の死に至るイエスの生き方が神の力によって自分たちの間に生き続け、それに、自分たちも従い続けられる信仰の確信を得た。「聖霊」と言われる事象は、イエスの生涯と十字架に結びあった信仰に生きる喜びを共振させる出来事であった。負わされた苦しみを神がイエスの生と死を通して共に担ってください。苦しみを作り出す社会のシステムに便乗する加害的実存を認め、そのシステムを変えていく闘いに参加する。人間世界の加害と被害の総体を、イエスの生と死を通して神自ら引き受けており、ここに、赦しの告知と悔い改めの呼びかけが発信されている。渡辺師は、「十字架に極まるイエスの生は、すべての人間に対する究極的な神の愛と赦しの表示であり、本来の人間性に立ち返ってイエスの生と死の姿に従うことへの招きである」と語る。「イエスに従う」ことが敗れても、なお、従い続けようとする招きを、イエスの十字架が呼びかけている。死んだ教理の贖罪論から、赦しと愛に招かれ、共生へと向かわせる贖罪は生きることへの絶対的肯定の福音である。